

## 4-1-12-2 輸血検査室

### 1. 概要

当院の輸血検査室の業務は、他の検査室と異なり、検査と検査結果配信という検査業務の他に、日赤から購入した医薬品としての輸血製剤を医師からのオーダーに応じて準備・在庫する業務を行っている。そして製剤への放射線照射、自己血を含む血液製剤の管理なども含め、輸血関連の業務全般について一括管理している。輸血検査室業務は24時間体制で行なっており、各診療科で実施される多岐にわたる輸血療法に対して、日勤帯は2名体制（専任）、夜間・休日の日当直帯は1名体制（臨床検査部技師13名による当番制）で対応している。

毎月開催される輸血療法委員会（委員長：手術室医長）では、関連部署、各科からなる委員と問題点を検討している。特に「安全な輸血」のための検証と対策には、輸血療法委員会を中心に医療安全管理室とも密接に連携し取り組んでいる。全職員を対象に、年間を通して開催される医療安全研修会では、平成18年10月には輸血療法委員会から「輸血療法におけるリスクマネジメント」についてテーマを挙げ、輸血検査室は「輸血検査室におけるインシデント」について講演した。

### 2. 輸血関連検査の件数・点数

輸血関連検査は血液型検査（ABO式・Rh式）、不規則抗体検査、直接・間接抗グロブリン試験、交差適合試験を主として行っている。その他、ABO血液型不適合臓器移植（肝臓・腎臓）では、抗A/抗B抗体価（I g M/I g G）を術前から術後一定期間の連日測定している。母児間血液型不適合妊娠（Rh式血液型・その他の型）の場合には、母体血清中の抗体価測定を分娩時まで定期的に行っている。平成18年度は、抗D、抗C、抗c、抗E、抗Rh17+抗E、抗M、抗Lea、抗Leb、抗Jra抗体の抗体価を測定した。また、母児間ABO式血液型不適合が疑われる新生児では、成人同型血球（ABO式）による間接抗グロブリン試験でIgGの抗Aまたは抗B抗体の検出を行い、同時に抗体価測定を行うケースもある。これら検査を含め、平成18年度に実施した輸血関連検査の総件数は12,198件、総点数は825,668点であった。

### 3. 輸血血液製剤の使用状況

外科手術・分娩（帝王切開含む）に関連した輸血、貧血に対する輸血、腫瘍（造血器・固型）に対する化学療法・造血幹細胞移植に関連した輸血、交換輸血、血漿交換をはじめとする血液浄化療法に関連した輸血、extracorporeal membrane oxygenation (ECMO) 施行時の輸血など、新生児（胎児）・乳幼児から周産期診療部受診の成人まで、幅広い年齢層を対象に輸血療法が行なわれている。

平成18年度の輸血血液製剤総使用量は、赤血球濃厚液 Rcc-LR 2,271単位、新鮮凍結血漿 FFP 2,296単位、濃厚血小板製剤 PC 9,186単位であった。自己血の使用は193単位であった。一方、廃棄製剤は131本595単位であり、高額な医薬品である輸血血液製剤の廃棄量削減をめざし、今後も輸血療法委員会を通じて「血液製剤の適正使用」の推進・啓発を継続していく。

平成18年度 血液製剤使用量

単位

